

桐原捨三とその時代

——「大衆新聞」の誕生・その前夜——

奥 武 則

はじめに——課題の設定

桐原捨三の名を知る人は今日、決して多くないだろう。しかし、たとえば『明治新聞雑誌関係者略伝』⁽¹⁾に当たってみるだけでいい。明治期の新聞人として桐原がなかなか重要な人物だったことはただちに知れる。

桐原について、『略伝』は約五百字を費やし、一八五五（安政二）年の誕生から一九二六（大正一五）年の死に至るまで、その生涯の履歴を詳細に記している。行数にして二十四行である。中江兆民の五十六行には及ばないものの、福沢諭吉の三十行に比べて遜色なく、黒岩涙香の二十行を上回る。

では、なぜ今日、桐原の一般的な知名度は福沢らに比べ

て著しく低いのだろうか。それは、一言で言えば、彼は新聞人ではあったが、いわば言論人ではなかったからである。

桐原の経歴については次節以降で検討するが、新聞との関わりは一八八一（明治一四）年に「大阪新報」（「大坂」を使った時期もあるが、以下は「大阪」に統一）に入社したことに始まる。⁽²⁾「営業部長」という肩書きだった。翌年二月には「神戸新報」に移り、主筆となっている。「主筆」といっても「神戸新報」は「すこぶる印刷のきたない新聞で、編輯局といつても僅か三人位」⁽³⁾という規模なのだが、少なくともこの時期には桐原は論説などを書いていたのだろう。清仏戦争に際して一八八四（明治一七）年一〇月から半年間、「神戸新報」「大阪新報」「兵庫ニュース」の合同特派員として中国にも渡っている。

だが、桐原が論説や記事を書く人間、つまり言論人とし

て新聞に関わったのは、この時期までだった。新聞との最初の関わりが「営業部長」だったことを考えれば、その期間は実に短い。年齢にして二十八歳から三十一歳（数え年、以下同じ）までの期間である。

一八八五（明治一八）年五月、桐原は東京の「改進黨新聞」に移る。この後、「毎日新聞」（「横浜毎日新聞」の後身で、現在の「毎日新聞」と系譜的なつながりはない）に転じ、さらに一八九九（明治三二）年、「大阪毎日新聞」へと活動の舞台を移してゆく。だが、「改進黨新聞」以降、いずれの新聞社でも桐原は営業面を主体とした経営陣の一人だった。

「新聞史」という研究領域がある。広く「ジャーナリズム史」と言ってもいい。日本でも一九二二（大正一一）年に刊行された小野秀雄『日本新聞発達史』以来、このジャンルで多くの蓄積がある。そして、この小野の古典的な著作以来、近代日本の新聞史は大ざっぱに言えば、草創期の政論新聞から始まって、大新聞と小新聞の並立と進み、日清戦争を契機に現代の新聞の原型である報道新聞が成立したというかたちで叙述されてきた。しかも、研究の関心はもっぱら「言論機関としての新聞」だった。小稿が対象とする

時期について、たとえば小野は、次のように書いている。

日清戦争以後の新聞界は主として営業本位、読者本位に傾き新趣向の競争、号外付録の競争、広告の競争、定価の割引等営業本位の競争が行われた。然して各紙皆中流以下の読者を集むることに苦心し、新聞紙の調子概して通俗的となり、戦前に比して紙面の体裁は全く一変した。⁽⁴⁾

この文章に、この時期の新聞が言論機関の「あるべき道」から逸脱してしまったことへの筆者の慨嘆を感じるのは私だけではないだろう。そして、桐原はまさに、ここに書かれたような新聞作りを行った人物だったのである。小野以来の古典的な手法の新聞史研究において桐原が正面から取り上げる対象ではなかったことは当然と言えば当然だっただろう。そこでは、彼はたかだか逸脱への道を走った「問題人物」に過ぎなかった。⁽⁵⁾

だが、いうまでもなく「言論機関」であることは新聞のすべてではない。私は先に「万朝報」のスクランダル報道を通して近代日本が「国民国家」として成立していく過程を垣間見た。⁽⁶⁾ 小稿の関心もまた新聞を通じて近代日本における「国民国家」の形成を考察することにある。前著同様、

ここでも新聞は「国民国家」という大きな枠組みの中に置かれることになるだろう。桐原捨三を彼の生涯の中でもっとも輝かしく生きた時代とともに考察することによって、近代日本の「国民国家」とその担い手たる「国民」の姿にながしかの光を当てたい。と同時に、その作業を通じて狭い新聞史というジャンルを超えたところで桐原捨三その人のいた場所を定位させたいと考えている。

一 挫折した民権家

桐原捨三は、挫折した民権家である。あるいは、政治家になり損なった男だった。

桐原は一八五五（安政二）年七月三日、武蔵国足立郡糠田村で、河野藤次郎の四男として生まれた⁽⁷⁾（桐原は後年の養家の姓。桐原姓に変わった時期については後に検討するが、以下は桐原捨三として表記する）。現在は埼玉県鴻巣市の市域に含まれる糠田村は当時戸数二百戸足らずの農村だった。河野姓の豪農が三家あり、桐原の生家は本家ではなかったが、相当な資産家だったようだ。藤次郎まで四代続けて名主を務めていた。一八七四（明治七）年四月六日

に糠田村の戸長に河野恵助という人物が任命されているが、河野恵助は桐原の四歳年長の実兄である。河野恵助は後に立憲改進黨に加わり、県会議員にもなる。

桐原の出生から青年期までについては、加藤政之助が『桐原捨三翁追懷録』（以下、『追懷録』）に寄せた文章に詳しい⁽⁸⁾。加藤は桐原より一年早く、糠田村の隣村である滝馬室村（現在はやはり鴻巣市内）で生まれた。彼は桐原ときわめてよく似た人生航路を歩みつつ、桐原のように挫折することなく、政治家としての成功を得た人物と言っている。「挫折した民権家・桐原捨三」は加藤と対比することによってくっきりと浮かび上がってくるのだが、その点は後にふれる。まずは、加藤の一文を中心に桐原の半生を追おう。

河野恵助と桐原捨三の兄弟は糠田村在住の稲田某なる漢学者について学んだ。学才ぬきんでいた桐原は、一八七三（明治六）年に開校した糠田学校の教員となる。十九歳だった。この学校の同僚教員に加藤政之助がいた。加藤は三年後、県令の白根多助に見いだされて、県学務課に移る。しかし、加藤はもともと東京の慶応義塾で福沢諭吉のもとで英学を学びたいと考えていた。これを知った桐原が同行

を持ちかけ、加藤は県庁を辞し、桐原は教員を辞め、二人で慶応義塾に入学した。⁽¹⁰⁾ 桐原二十一歳のときである。一八七八（明治一一）年、二人は慶応義塾を卒業する。

ここまでの桐原の履歴は、明治初期に青年期を迎え、自らの可能性に目覚め、社会的上昇をめざした人々にある程度共通するものだろう。ただ一つ、いくぶんユニークと思われる経歴が「桐原捨三君小伝」⁽¹¹⁾に記されている。慶応義塾在学中に三菱商業学校に通い、簿記などの商業実務を修得したというのである。三菱商業学校は岩崎弥太郎が自らの会社で働く社員を養成すべく、一八七八（明治一一）年に開設した。しかし、まだ時代が早すぎたのか、一八八四（明治一七）年には閉鎖された。

「桐原捨三君小伝」が記すように、桐原の三菱商業学校通学が慶応義塾在学中だとすると、その期間はごく短い。いずれにせよ、新聞に関わりつつ、桐原の主なる職務が「営業」だったのは、このあたりにそもその淵源がありそうにも思える。あるいはこの当時から桐原が持っていた商業実務への志向が後にそうしたかたちで現れたと考えるべきなのかもしれない。

慶応義塾を卒業した桐原は、駅通局に入る。駅通局は通

信省の前身であり、当時は内務省部内の一局だった。桐原の職務は明らかではないが、遅くとも一八八〇（明治一三）年一月には、大阪に移り、八軒家郵便局で勤務している。

これは福沢諭吉の提唱によって生まれた交詢社の発足時の会員名簿に「大坂八軒家郵便局 駅通局 河野捨三」とあることから知れる。⁽¹²⁾ 交詢社が発会式を行ったのは同年一月二五日である。しかし、桐原が駅通局に勤めていた期間はごく短い。前年から準備が進み、この年一月一日に開設された大阪商業講習所の所長になっているからである。

加藤政之助によると、この桐原のすばやい転身には福沢諭吉が大いに関わっていた。官が嫌いだっただ福沢は、桐原が「駅通局の小役人」になったことが気に入らず、「大阪新報」の主筆になっていた加藤に「どうかやめさして大阪あたりで何か相当の地位を得る途はないか、お前考えてみよ」と言っただが、⁽¹³⁾ これは加藤が後年桐原と福沢の関係をいくぶん誇張して語ったものである。

加藤は一八七九（明治一二）年八月一四、一五両日にわたって「大阪新報」に「商法学校設ケル可ラズ」と題した社説を書いた。毛利敏彦が指摘しているように、⁽¹⁴⁾ 加藤は師の福沢の意を受けて、この社説を書いた可能性が強い。こ

の種の学校の必要性は福沢自身がかねて主張していたことだった。大阪商業会議所会頭として大阪経済界の指導者であり、当時「大阪新報」の実質的な経営者でもあった五代友厚と福沢・加藤のラインで大阪商業講習所の開設が動き出したのである。大阪府や住友、鴻池両家も協力した。当時、すでに大阪にいた桐原は、旧知の加藤に誘われ、所長を務めることになったのだろう。

大阪商業講習所は、一八八一（明治一四）年八月、経営を大阪府に移管して大阪府立大阪商業講習所となる。桐原はこのときに所長を辞任している。府立移管は設立当初からの構想だったようで、桐原の所長就任も暫定的な要素が強かったのかもしれない。なお、同講習所は後に大阪市に移管され、大阪商科大学となり、さらに大阪市立医科大学との合併を経て現在の大阪市立大学となった。

ここで、桐原が河野姓から桐原姓に変わった時期について検討しておく。『追懷録』の「略年譜」は、一八七八（明治二一）年一二月に「信州松本在桐原村旧家（当時東京在住）桐原なか子の養子となり桐原姓を冒す」と記している。しかし、一八八〇（明治一三）年七月の「大阪商業講習所設立之緒言」には「河野捨三述」とある。そして、

大阪府に移管する際の「大阪商業講習所引継目録」（一八八一・明治一四年八月一日付）には「事務主任員 桐原捨三」の名がある⁽¹⁵⁾。したがって、明確には特定できないが、この間に桐原家の養子になったと考えられる。養子縁組の理由は不明だが、この時代、長男以外が他家の養子になることはごく一般的なことだった。

さて、桐原が政治に関わるようになったのはいつからだったのだろうか。正確には分からない。矢野龍溪は『追懷録』に次のように書いている。

桐原君の中年以後を知る者は、皆君が才幹ある事業家としての手腕に敬服しておる、しかし、私の如く君の青年時代から親しく相知っている者は、他の方面の君の本領をも知っている。私から云えば君の前半生は愛国の志士たる型であった。今日から云えば、其頃は混沌たる草創の時代で、我々青年の熱中する所は、我が国に憲政を布き、国会を開くの一事であった。⁽¹⁶⁾

龍溪矢野文雄は桐原より五歳年長の一八五〇（嘉永三）年生まれ。慶応義塾の先輩でもある。「郵便報知新聞」副主筆を経て大蔵省に入るが、明治一四年の政変で大隈重信とともに下野し、「郵便報知新聞」に戻り、社長となった。

一八八二（明治一五）年三月、大隈が立憲改進黨を結成した際には主導的な役割を果たした。政治小説「経国美談」の作者としても著名だが、後には大阪毎日新聞社の相談役や副社長を務めるなど、桐原との縁は深い。

むろん、矢野も書いているように「混沌たる草創の時代」において、目覚めた青年たちが「政治」への情熱を駆り立てたのはごくふつうのことだったろう。桐原もそうした「政治青年」の一人だった、とまずは言える。しかし、ここでも桐原の友人、加藤政之助が果たした役割は大きかったはずだ。

加藤は「大阪新報」などでジャーナリストとして活動する一方、すでに一八八〇（明治一三）年には埼玉県会議員に当選し、二年後に改進黨が結成されると、その有力な活動家として活躍する。すでに慶応義塾在学中にも「東京日日新聞」や「東京曙新聞」にたびたび寄稿するなど積極的な活動をしていた。慶応義塾入学もそうだったが、大阪での桐原の出処進退においても加藤のイニシアティブが濃厚にみられる。もちろん先に述べたように桐原自身の指向もあったには違いない。だが、桐原は加藤にリードされるかたちで国会（民選議院）開設を求める自由民権運動に加わっ

ていったと推測される。

多彩な広がりを持っていた自由民権運動についてここで詳述することはできないが、国会開設の問題に限れば、一八八一（明治一四）年七月に起きた開拓使官有物払い下げ事件が運動の新しい局面を開いた。この問題の紛糾をきっかけに同年一〇月、大隈重信が参議を罷免されて下野し（明治一四年の政変）、同時に一八九〇（明治二三）年に国会を開設するとの詔が出された。この詔を受けて、同年には自由党が、そして前述したように翌年には改進黨が結成された。

加藤政之助は「大阪新報」を舞台に開拓使官有物払い下げをめぐる大いに政府批判の論陣を張った。この加藤を擁護するかたちで桐原は盛んに政談演説を行ったという。そして、前述のように大阪商業講習所の大阪府移管ととも所長を辞し、一八八一（明治一四）年八月、営業部長として「大阪新報」に入る。加藤の引きがあったことは明らかだろう。

「新聞史」的に言うと、この時期以降しばらくは「政党新聞」華やかなりし時代となる。一八九〇（明治二三）年の国会開設が決まり、自由党、改進黨、さらには立憲帝政党

が誕生した。各党は自らの主張を展開する場として新聞を選んだのである。

「大阪新報」は社内対立から「大阪日報」「大坂」を使う場合もあるが、以下は「大阪」に統一⁽¹⁶⁾を退社したグループによって一八七七（明治一〇）年八月に創刊された。開拓使官有物払い下げ事件での加藤の論説など、桐原が入社した時期には改進黨結成につながる論調を鮮明にしていた。桐原は一八八二（明治一五）年二月には、「神戸新報」主筆に迎えらる。中央で改進黨が正式に旗揚げするのは、すでに述べたようにこの年三月である。桐原は議員になっている。時間的には桐原の「神戸新報」入りの方が少し早いのだが、桐原には兵庫県下の改進黨勢力を伸ばすという課題があったに違いない。桐原主筆のもと「神戸新報」も兵庫改進黨の機関紙的な新聞となる。

こうして、桐原は改進黨の政党人兼新聞人として世に出ていくのである。演説会にも盛んに登場した。いくつかの漢詩を別にすれば、桐原の残した時論的な文章は残念ながら目にしていない。文章は苦手だったのだろうか。だが、弁舌はさわやかだったようだ。次の証言は桐原の「神戸新報」時代についてのものである。

此時代は桐原君は血氣旺盛な少壮政論家として阪神間各方面に飛躍發展され又巧妙な弁舌家でありました。

其の頃神戸栄町に赤心社というのがありました。これは淡路の人々が北海道開拓のため作った組合であつてその事務所の二階が広がったので同志の人々は毎月學術演説会という名義で政談演説をやっていましたが桐原君も毎時此会に出られて雄弁を揮っていました。⁽¹⁷⁾

改進黨の政党人兼新聞人という意味では、加藤政之助という先輩がいた。加藤は前述のように、すでに埼玉県會議員になっていた。そして、桐原はここでも加藤の後を追うかたちになる。

一八八五（明治一八）年五月、桐原は「改進黨新聞」に総務理事として迎えられて東京に帰る。「改進黨新聞」は一八七八（明治一一）年に創刊された「有喜世新聞」に始まり、「開花新聞」を経て、桐原が入社する前年に「改進黨新聞」となった。「郵便報知新聞」の姉妹紙であり、その名の通り、改進黨系の新聞だった。総務理事という役職がどういったものかは分からないが、やはり営業面での責任者だったのだろう。⁽¹⁸⁾東京に戻った桐原は、こうして新聞人として活躍する一方、この年七月、東京府會議員に本所区から立候

補して当選する。埼玉県会議員だった加藤に対し、桐原は東京府会で本格的に政治の世界に踏み出したのである。

改進黨員としても着実にその地歩を固めていく。たとえば、改進黨は一八八六（明治一九）年四月四日、浅草井生村楼で第二回大会を開いたが、大会前日の三日に同所で演説会を催した。同日の「毎日新聞」の予告では十二人が演壇に立つことになっているが、尾崎行雄、島田三郎、加藤政之助らとともに桐原の名前がある。

一八八九（明治二二）年には東京府会議員に再選される。この時期、加藤は埼玉県会で議長を務めるなど政治家としてのステータスを着々と重ねているが、桐原もそれを追っていたわけだ。そして、二人はともに一八九〇（明治二三）年七月一日に行われた第一回衆議院議員選挙に立候補する。選挙区は二人にとっての故郷、埼玉県が選ばれた。加藤は第一区。桐原は第二区。結果はともに落選である。地方政治家から国政レベルへの進出は、この段階では二人とも一敗地にまみれたのだった。最下位の四位だった加藤に比べ、九百六十八票を得て次点（当選者は九百九十七票）になった桐原の方が数段、善戦といっている。ところが、一八九二（明治二五）年二月一五日の第二回衆議院議員選

挙で、これが逆転する。

前回と同じ埼玉第一区から立候補した加藤に対して、桐原は東京第五区（本所、深川）に鞍替えした。本所は東京府会議員としての選挙区である。だが、加藤は見事に当選を果たしたのだが、桐原は今回も落選してしまう。定員一人（当時は基本的に小選挙区制）のところに桐原を含めて四人が立候補した。選挙当日の「毎日新聞」は「四人の候補者中桐原捨三、太田実両氏の競争最も激烈なり」という書き出しで、有権者の激しい取り合いぶりを報じている。結局、太田が八十二票で当選、桐原はわずか二十七票しか得られず三位という惨敗だった。

この後、加藤は第四回と第十四回を除いて第十五回（一九三六・大正一三年）まで毎回当選する。進歩党、憲政党、憲政本党、憲政会などに所属し、一九二七（昭和二）年には貴族院議員に勅選された。閣僚などにはならなかったが、自由民権運動以来の政治活動をまっとうした政党人だったといっている。一方、惨敗した桐原は東京府、東京市との関わりは少し続くが、ふたたび政治の表舞台に出ることはなかった。

当選にしても落選にしても得票数の少なさにびっくりす

るが、極端な制限選挙（直接国税十五円以上を納める二十五歳以上の男性が有権者）だったのである。しかし、有権者が少く、記名投票だったことはむしろ選挙戦の熾烈さを増した。しかもこの第二回総選挙は、民党（自由党、改進黨）と吏党の間で激しく闘われ、政府による空前の選挙干渉が行われた選挙として名高い。桐原を大差で下した太田も吏党である。先の「毎日新聞」記事にも巡査が立ち番して太田派の選挙本部を守っている様子が記されている。

二回の選挙戦に桐原自身かなりの選挙運動費をつぎ込んだだろう。『追懷録』に三木善八という人が「老友をなつかしむ」という一文を寄せているが、そこに「君の生涯一代の悲境であり、危険区域であつたろうと思う、差押えがくる、姿をくらます、友人として一体これはどうなり行くかと案じられた⁽¹⁹⁾」とあるのは、この時期のことだろう。二度目の選挙には「改進黨新聞」からも資金が出た。これには社内にも異論があったようで、桐原の退社を求める運動も起きた。⁽²⁰⁾ 結局、桐原は「毎日新聞」を経て、一八九九（明治三二）年に「大阪毎日新聞」に移ることになる。

桐原が衆議院議員の選挙に当選していたとしても、似た履歴を経てきた加藤政之助のように成功したかどうかは

分らない。むしろ、桐原には政治家的な資質が欠けていたようにも思える。⁽²¹⁾ しかし、いずれにしろ、こうして自由民権の活動家から政治家へというコースに乗ることに失敗して、桐原捨三は「新聞」という場に残ることになった。彼の才能は、そこでこそ発揮されたのである。

二 桐原式

桐原を「大阪毎日新聞」（以下「大阪毎日」）に招いたのは、本山彦一だった。本山は一八五三（嘉永六）年肥後熊本生まれ。桐原より二歳年長でやはり慶応義塾に学んでいる。ただし本山の慶応義塾入学は一八七一（明治四）年だから、桐原の在籍時期とはずれている。「大阪新報」「時事新報」を経て、一八八六（明治一九）年には大阪の藤田組の支配人となり、さらに一八九三（明治二六）年には総支配人として経営を統括するようになった。桐原との交際は、「大阪新報」時代に始まった。藤田組は大阪毎日新聞社に出資していた。この関係から一八八九（明治二二）年、相談役として「大阪毎日」の経営に関わるようになった。後には業務担当社員、さらに一九〇三（明治三六）年に社長

に就任するのだが、桐原招聘の時期はまだ藤田組総支配人としての仕事の比重が重く、とくに岡山県児島湾干拓事業で忙しかった。このため自分にかわって営業面の責任者を務めることのできる人物を求めている。

当時の大阪毎日新聞社社長はやはり本山らが招いた原敬だった。一九一八（大正七）年に政党政政治家として日本最初の政党内閣を組織する原である。本山と桐原の長い交友からいって、前述のような事情を抱えた本山が原に桐原の入社を促したことはまちがいない。本山の伝記も次のように記している。

翁（本山）はその本務たる藤田組の大事業児島湾開墾工事が愈々その緒に着き、三二年五月中に起工式を挙げたので、これまでのように専心「大阪毎日」の経営に携われぬところから、己れに代って営業局を宰する人を求め、偶々「大阪新報」以来の旧知桐原氏が、東都の新聞界で不遇を歎じているのを聞き、三十二年十一月、氏を「大阪毎日」に招いたのであった。⁽²²⁾

ここに述べられている「不遇」はすでにふれた経済的な問題のほかに「毎日新聞」の経営陣から、いわば干されていた状況を指しているだろう。しかし、桐原が旧友の本山

に泣きついたというわけではない。たとえば、十一月五日、本山は原に手紙を出して、桐原から出された二つの「入社条件」について相談している。⁽²³⁾一つは、東京では「毎日新聞」のほかにいづつか仕事をかかえていて大阪に行くとなると、これらを辞めなければならない、ついては「月給百二十円支給を受け度との事」。もう一つは「旅費及家財始末等ノ為一時意外之費用を要するに付、四五百円之旅費支給を受け度との事」。「月給百二十円」は高等官の初任給が五十円程度の時代だから、相当の高給だろう。桐原が入社する二年前に原敬が最初に「編集総理」として招かれたときの年俸は五千円で、破格の待遇といわれた。⁽²⁵⁾桐原の待遇は年俸に直せば千四百四十円ということになる。本山の方では月給百円のつもりだったが、手紙を出した後、同月一〇日には直接原に会って「二〇円アップ」の了解を取り付けている。⁽²⁶⁾旅費の方も会社の規定以上のものは貸付金とすることで四百円が支払われ、同月一四日に書留で桐原に届いたことが、桐原の原宛の礼状で確認できる。⁽²⁷⁾

こうして桐原は「大阪毎日」の人間となる。肩書は「営業主任兼広告部長」、後に「営業局長」となる。ところで、この時期、「大阪毎日」は大阪の新聞界でどのような位置

にあったのだろうか。桐原の仕事の重要な背景としてまずはそれを明らかにしておきたい。

「大阪毎日」の歴史は一八七六（明治九）年に創刊された「大阪日報」に始まる。⁽²⁸⁾大阪で最初に刊行された「政論新聞」だった。同紙は一八八二（明治一五）年、「日本立憲政党新聞」に受け継がれる。日本立憲政党は前年、中島信行を党首にして大阪で結成された自由党系の政党である。「政党新聞」の時代だった。しかし、日本立憲政党が一八八四（明治一七）年に解散したため、翌年再び「大阪日報」と改題する。経営は不振だった。やがて、独自の言論機関を求めていた藤田組の藤田伝三郎ら大阪の実業界有志が「大阪日報」に目を付け、経営権を買収して「大阪毎日」とした。こうして「不偏不党の実業界の機関紙」を唱う「大阪毎日」が一八八八（明治二一）年一月二日にスタートした。

履歴から明らかなように「大阪毎日」は典型的な「大新聞」としての道を歩んできた新聞だった。「不偏不党の実業界の機関紙」を標榜しつつ、この「大新聞」的性格はなかなか抜けず、部数は伸びなかった。そこで本山彦一が招かれたわけである。当時の発行部数は約五千部だった。

「小新聞」から出発した「大阪朝日新聞」（以下「大阪朝日」）はすでに同じ時期、三万四千部近い部数を出しており、後に「大朝」「大毎」と併称される両紙は、この段階では比較にならないほど「大朝」が「大毎」に水をあけていたのである。

「大阪朝日」はその後も順調に発展し、桐原が「大阪毎日」に入った一八九九（明治三二）年には十一万三千余部に達している。「大阪毎日」の方も、本山の指揮下に「大新聞」的な色彩を抜けだし、急速に「大阪朝日」に迫りつつあった。一八九四（明治二七）年に起きた日清戦争が、かつての政論本位の新聞をニュース中心の「報道新聞」に変えていった。「大阪朝日」「大阪毎日」両紙は、その先頭を切っていたのである。とはいえ、「大阪毎日」の劣勢はまだまだ明らかだった。⁽³⁰⁾「大阪毎日」の有力販売店を経営していた岡島真蔵の回想によれば、大阪市内の販売部数は一万部に達していなかった。「大阪朝日」に追いつけが、当時の「大阪毎日」の、そしてつまりは桐原に与えられた課題だった。その課題はいうまでもなく新しい読者を獲得することによってのみ達成される。桐原は早速、読者獲得の企画を打ち出す。

明けて一九〇〇（明治三三）年一月四日の「大阪毎日」五面トップに「回向院本場所 化粧廻の懸賞」という見出しの社告が掲載された。当時の大相撲は回向院で行っており、一場所は九日間だった。この社告は、八日から始まる一月場所の優勝力士に「特に本社^のの嘱托^{（ごうたく）}に応じ刺繍^{（さしぬい）}の術に於ては三都に並びなき高島屋呉服店が竹内棲鳳氏の下図に依り苦心経営の余に調整せし相撲道の表道具たる化粧廻し」を懸賞として授与するという内容である。懸賞の化粧廻しは「五百円を価値せる」ものだそうで、すぐ下に「図解」が載っている。

これが桐原の採用した最初の企画である。だが、優勝力士に化粧廻しを贈る——これだけでは実のところ販売部数に直接結びつかない。ねらいは、この日の新聞の最終面に掲載されているもう一つの社告にあった。「化粧廻し受領力士予想投票募集」が、それだ。

回向院一月場所の優勝力士に向つて本社より相撲道の表道具たる化粧廻しを懸賞するの大奮発をなしてより、世間幾多の好角家は果して其月桂冠の何者の手に落るやを知らんとして頻りに予想を凝しつゝあるを機とし、本社は博く其予想投票を募集し左の方法に依て更に其

的中せる投票者に懸賞品を授与せんとす。（新聞記事の引用に際しては仮名遣いは原文のままで適宜句読点を入れた。ルビは基本的に省略）

予想投票の用紙はこの社告の最後に刷り込まれている。これを切り抜いて投票する。これだけしか使えない。要するに、「大阪毎日」のこの紙面を手に入れないと投票できない仕組みである。懸賞品は「化粧廻しの縮図と本社徽章とを本金に焼付たる杯一個」となっている。

この場所の優勝力士は前頭五枚目の稲川だった。成績は八勝一敗。二八日の二面にその結果が報じられ、七面には授与された化粧廻しを付けた稲川の絵とともに稲川のプロフィールがかなり細かく紹介されている。ここには各力士の「星取り表」も載っている。相撲の報道に関する限り、すでに現在の新聞とほぼ同じ要素があったといっている。読者の優勝力士予想投票の方はといえば、翌二九日に結果が載った。投票総数は四万二千二百七十四票。優勝の呼び声が高かった常陸山が一位で一万七千九百九十票。続いて梅の谷（後に梅ヶ谷と改名）が一万五千百五十五票。稲川はわずかに四十四票で、めでたく全員が懸賞品を手にしたようだ。

以上が桐原が「大阪毎日」で行った読者獲得策第一弾の経過である。桐原の一連の新聞販売政策は、のちに「桐原式」の名を生むが、この第一弾は実のところまだ不完全な「桐原式」だった。新聞に投票用紙を刷り込んで読者参加の投票を行う。「桐原式」のこの重要な要素はすでにここにみられるのだが、以後のケースと根本的な違いがある。

相撲は当たり前のことだが、実力の世界である。いくら得票したとしても優勝できるわけではない。優勝そのものに読者は関与することができないわけだ。だから、「予想投票」といっても、投票する読者の、いわば「入れ込み度」には限界がある。四万票を超えた投票数（ほかに無効票がかなりあったという）は、確かに少なくはないだろう。だが、「入れ込み度」をぐっと増した次の試みによって、完全な「桐原式」が誕生する。

対象に選ばれたのは「素人義太夫」だった。二月二〇日に「素人義太夫投票募集」の社告が載った。義太夫と聞くと私なども何やらふつうの人の趣味には遠いもののように感じてしまうのだが、それは現代人の誤った感覚だろう。義太夫（義太夫節）は竹本義太夫が創始した浄瑠璃の流派である。幕末期以降は文楽人形浄瑠璃の音曲として親しま

れ、後には音曲だけでも演じられる。明治期になってとりわけ義太夫の発祥地である大阪では庶民に圧倒的な人気を持っていた。義太夫自慢のセミプロも多かった。桐原自身、大変な義太夫好きで自分でも語ったから、そのあたりの事情がよく分かっている。二番目の企画に「素人義太夫」を選んだのだろう。社告は次のように呼びかけた。

河竹の流れ逆に遡りて歌舞伎の栄は東都に奪われ、虎屋饅頭全く廃れて影を止ざる今日、優に浪華の名物として文楽に根城を構へ今尚越路、大隈の名家を絶ざる太棹の栄は所謂天狗連なる素義太の団結動がざるに基くのみ。本社はこの名物をして益々名物たるの実を全ふせしむるために左の方法に依り懸賞投票の募集をなさんとす。天狗連を以て任ずるものは斯道の為め続々投票あらん事を望む。

要するに「素人義太夫」を対象にした人気投票である。投票用紙は前回同様、紙面に刷り込まれている。投票期間は三月二〇日までの一カ月間。懸賞商品是一等二人が「正価百円」の「蒔絵見台」、二等二人が「正価三十円」の「緋珍肩衣」、三等十人が「小紋肩衣」である。見台は義太夫を演じるときに台本を置く台であり、後の二点は衣装で

ある。「蒔絵見台」や「繻珍肩衣」は後の紙面で絵入りで紹介されている。

今回の特色は投票が始まると、連日のように途中経過を掲載したことだ。つまり、競争をあおること、投票数を増やすことをねらったわけである。二月二三日紙面に早くも前日までの集計が載った。一位は、東区松屋町大手筋の「貴鳳」という人で、百三十二票。一票の五人まで十八人が並んでいる。この途中経過を見ていくだけでも、桐原が仕掛けたこの企画が大きな渦となって人々を巻き込んでいった様子が分かる。

三月三日はまだまだ一位の得票でも二千九百四十七票といった状況だが、一位の得票は八日に七千三百六十二票、一八日には一気に四万九百十六票となり、さらに締め切り前日の一九日には五万八千四百二十三票にふくれた。しかも、一八日段階のトップは西区梅本町の「かつら」だったのだが、一九日には前日集計では三位だった北区堂島の「貴木」が一気に三万六千票も増やしてトップを奪い取っている。

最後の開票は三月二五日午前九時から大阪毎日新聞社本社三階で行われた。二六日紙面にその様子が報道されている。

る。集計済み分の高得票者十四人と「此候補者の為め運動せし各参謀官数十名」を立ち合わせて、封印してあった投票箱を開いた。しかし「名にし負ふ総投票数二百万以上に余し事とて投票係員を増員したるに拘らず一日の間には結了すべき見込みなく……」といった状況だった。

最終結果は翌二七日紙面に載った。結局、最終段階でトップを奪った「貴木」が十三万八千五百四票で逃げ切った。この日の紙面には過熱した運動ぶりを伝える記事も出ている。大阪に劣らず素人義太夫が盛んな京都の義太夫好きが高点者に京都の人間を入れないと京都の沽券にかかわると、本人はもとより雇い人も動員して運動に励んだ。本人は市内の銭湯を回っては番台で知った人を待ち受け「貴君は何の新聞を取りますか、エ、朝日新聞お止しなさい毎日新聞を取ておくれやす投票用紙がありますぜ」と説得して投票を依頼したというのである。

総投票数二百万は前回の相撲化粧廻し懸賞の四万に比べると、実に五十倍である。むろん、これがそのまま読者数の増加になったわけではないが、桐原の戦略は見事に成功したといっている。桐原は、立て続けに二匹目、三匹目のドジョウをねらう。素人義太夫懸賞投票の最終結果が掲載

された三月二七日の六面トップに今後の懸賞募集の予告が出た。大型の活字をとどころに使って、破格の扱いである。

まずは「素人謡曲家」。義太夫の次は謡曲というわけだ。さらに、「空前の大懸賞!!!」という大見出しで今後の予定が記されている。

本社が国民の娯楽たる各種の芸道に対し之を奨励するために尽す処ありたるは読者の既に知悉せらるゝ処なるべし。

人気投票の懸賞企画には「芸道奨励」という大義名分が与えられている。「素人謡曲家」の後は俳優である。劇壇が東西とも沈滞していると憂えた後、記事は続く。

こゝに於てか我社大いに斯道を奨励刺激するところあらんがために空前の大懸賞を行ふところあらんとす。その方法は技芸優等の俳優（甲）及び前途有望の青年俳優（乙）の二種に分ち敢て関西と云はず広く全国にその投票を募集し、その優等高点者に向つては本社が三井呉服店及飯田（高島屋）呉服店をして天下の名工を集めて調製せしめたる左の綴帳幕一張宛を送らんとす。（傍点部分は大型活字）

この綴帳についても「実価金一千五百円」で「綴子地に金銀色糸をもて叢雲及び鳳凰を縫取らしむるものにして日本の劇場あつて以来嘗つてかゝる美麗高価の綴帳をもて飾られたるものなく真に空前のものに属せり」と大仰な説明が付されている。

「素人謡曲家」の懸賞人気投票は四月七日から五月二日までの期間で行われた。連日紙面に途中経過を掲載するなどの方式は「素人義太夫」と同じである。この間、四月四日の紙面には「素人義太夫大番付」を同月一二日に「本紙付録」として二十万部発行する、との社告も出ている。人気投票の結果を番付表にしたものである。「素人謡曲家」も「素人義太夫」に劣らぬ人気を得た。投票総数は不明だが、五月七日紙面によると、一位の「広島市三川町 金剛流 田中可然」は十七万五千百十三票を集めている。だが、新聞販売戦略として圧倒的な成功を収めたのは、何といつても第三弾の「俳優投票」だった。

五月に入つて連日のように「七千円の大懸賞!!!」の大見出しで「俳優投票」の社告が出た。すでに予告済みの綴帳のほか新に「楽屋鏡台」六個、浴衣生地百反、足袋三百足など追加商品も登場している。七千円というのは現代

の感覚でいえば、億の単位になろう。

投票は社告ではこの月二〇日から七月一〇日までとなっていたのだが、実際には七月一日に最終の開票を行ったらしく、五日に「最終確定得票」が掲載されている。得票数は「老練の部」一位の片岡我當が二十七万三千百五票。以下、二位二十五万八千七百三十八票、三位二十五万九百一票。「青年の部」の一位は伊藤右之助で実に七十七万七千五百八十八票、以下、二位五十万四千四十七票、三位三十万六千二百二十票。投票総数は今回も分らないのだが、上位の得票からみても「素人義太夫」の二百万をはるかに超えて数百万票に達したことは明らかだろう。「老練の部」と「青年の部」は同じ投票用紙に一人ずつ書くことが出来るのだが、それにしても膨大な投票用紙（つまり「大阪毎日」）が動いたことが分かる。

この膨大な投票数の背景には「大阪毎日」自身が販売店を動員して投票用紙を買い集めて後で関係者に売るという「不正行為」もあったようだが、販売部数は確実に伸び、固定読者も増えた。桐原が「大阪毎日」に入社する前にはおそらく十萬部に遠かったはずの発行部数は一九〇三（明治三六）年元日には十三万三千七百六十一部になっている。⁽³²⁾

むろん、こうした部数の伸びを「桐原式」の功にだけに帰することができないのは明らかだが、⁽³³⁾桐原の戦略が見事に人々を捉えたことは間違いない。

三 感性の均質化

一枚の写真が『稿本本山彦一翁伝』（大阪毎日新聞社、一九二九年）に収録されている。大黒天に扮した本山の後ろにエビスの格好で控えているのは桐原である。「大阪毎日」は一九二四（大正一三）年一月一日の発行部数が百万部を超えた。この写真は大阪市公会堂で行われたその祝賀会でのスナップである。

桐原は一九〇九（明治四二）年、五十五歳で大阪毎日新聞社をいったん定年退職したが、翌年には相談役として復帰し、監査役を経て、一九二三（大正一二）年には専務取締役となった。この写真は、その翌年ということになる。同じ時期、「大阪朝日」も百万部を達成している。今日に続く「大衆新聞」がまさにこの時期に誕生したといっている。それを見届けた桐原は一九二六（大正一五）年七月、病気で専務を辞し、八月二五日に死去する。享年七十二歳

だった。

桐原が「桐原式」と呼ばれた一連の販売戦略を展開し、「大阪毎日」の部数を急速に伸ばしていった時期、ちょうど今世紀が始まったころは、まさに「大衆新聞」が誕生する前夜だったといっている。ここで小稿が最初に設定した課題に立ち戻らなければならない。桐原の新聞販売戦略を近代日本における「国民国家」とその担い手である「国民」との関わりの面から考えてみたい。

新聞における人気投票や懸賞そのものは桐原が初めて行ったわけではない。一八八五（明治一八）年に「今日新聞」が行った「現今日本十傑投票」が日本におけるその種のものの最初のような⁽³⁴⁾。野崎左文がイギリスのペルメル・ガゼット紙の「ベスト・テン」の趣向をまねて企画したもので、政治家・学術家・著述家・教法家・医家・軍師・法律家・新聞記者・商法家・画師の十部門で、それぞれ十人の名前を挙げて読者に各部門に投票させた。各部門の最高点者をすべて指名した人に賞金五円を出し、三カ月分の購読料を無料にした。投票期間は四月二六日から一カ月間。投票総数は千四百六票だった。ちなみに、各部門のトップの一部を紹介すれば、政治家・伊藤博文、学術家・中村正直、著

述家・福沢諭吉、新聞記者・福地源一郎といったところである。

桐原自身も「毎日新聞」当時に、俳優の人気投票をはじめ、「自動車乗熟練家」「建築請負技師」といったものまでを対象に人気投票を行っている。桐原が「大阪毎日」で大ヒットさせた「素人義太夫」にしても、「今日新聞」が一足早く、一八九八（明治三一）年四月に人気投票を行っている。俳優についても一八九三（明治二六）年六月、「時事新報」が「青年俳優三人投票」という企画をしている。だから、桐原は自分自身の経験も含めて先行の事例をもとに「大阪毎日」で次々に人気投票の企画を打ち出したのである。しかし、ではなにゆえにそれらは「桐原式」と呼ばれることになったのか。

むろん、これまでにない人気を呼び、すでに述べたような大量の投票が集まったことが大きかった。部数の伸びについてすでに指摘した。つまり、桐原の企画は大成したのである。一つには、こうした中で「桐原式」という言い方がされるようになったのだろう。「大阪朝日」をはじめとして、桐原のやり方を批判ないしは揶揄する向きからの、いくぶんの皮肉あるいは軽侮の気持ちだが、この言葉には漂っ

て⁽³⁵⁾いる。

しかし、問題はこの先にある。ではなにゆえに「桐原式」は成功したかを、私たちは問わなければならない。

一つは「大阪毎日」の販売網の整備が急速に進んだ時期だったことが重要である。その背景には鉄道網の進展があった。東海道本線が新橋から神戸まで全通したのは一八八九（明治二二）年だが、「大阪毎日」の販売エリアである西日本でも関西、山陽、九州などの幹線が明治二〇年代から三〇年代に開通し、支線も次々に出来ていった。「大阪毎日」は鉄道が伸びて新しい駅が出来ると真っ先に新聞販売店を開拓したという⁽³⁶⁾。

第二に、印刷設備の面での技術革新が大きな要素だろう。

「大阪毎日」は一八九四（明治二七）年三月からフランス・マリノリ社製の輪転機三台で印刷されるようになった⁽³⁷⁾。それまでのロール式印刷機で一枚一枚印刷していた新聞は両面を一気に一時間に一万五千部も印刷できるようになったのである。

以上二点は「桐原式」の成功を準備した、いわばハード面の要素といえるだろう。そして、次なる背景は「大衆」

の存在である。「大衆」の意味内容はさまざまに理解されるだろうが、ここでは識字能力を持った人々の広汎な存在をまず前提にしたい。

明治国家が被治者として生きてきた前近代の民衆を「国民国家」を担う「国民」に創りあげていく過程については近年多彩な研究がある。「国民」はいくぶん同義反復を承知でいえば、「国民意識」を持った人々といっている。初の対外戦争だった日清戦争（一八九四・明治二七年）一八九五・明治二八年）を経験したことによって「国民」化は一つの段階を超えた。そして、「国民」化の主要な回路である学校教育の普及もこの時期になると急速に進む⁽³⁸⁾。新聞や雑誌を読み、狭い郷党を超えた「国家」大の出来事に関心を持つ人々が、この時期少なくとも東京や大阪といった大都市には分厚い層として姿を現してきたのである。それが、ここである「大衆」である。前述のハード面の要素に加えて、こうした「大衆」こそが「桐原式」の成功を支えたと私は考える。「大衆」と「桐原式」との間にあった親和力に光を当てなければならない。

大阪毎日新聞社は一九〇三（明治二六）年に大阪・天王寺で開かれた第五回内国博覧会に輪転機を出品し、観客に

実際に新聞を印刷してみせる試みをした。読者には優待券を配り、会場内に無料休憩所を設けて茶菓の接待もした。

この企画を中心になって進めたのも桐原だった。大阪毎日新聞社はその後、大大阪博覧会（一九二五・大正元年）やこども博覧会（一九二六年・大正二年）など大掛かりな博覧会を自ら主催していく。こうした博覧会と「大阪毎日」の深い関わりに桐原がどのように関与したのかは明らかではないが、少なくとも出発において桐原が果たした役割は大きかった。

博覧会は近代西洋が生み出したものであり、明治の日本は他の文物同様にこれをいち早く輸入した。吉見俊哉は博覧会について斬新な分析を試みた自身の著書のねらいについて「博覧会が、近代の大衆の感覚や欲望どのように動員し、再編していったのかを明らかにしていくこと」と記している。⁽³⁹⁾ 私には桐原が博覧会と無縁ではなかったことがきわめて象徴的に思える。「大衆の感覚や欲望の動員」とは、まさに桐原が「桐原式」で行ったことだった。

では、博覧会という場合は、そこに動員された人々の中に何を生みだしただろうか。吉見は「展示された商品を相互に比較し、選別していくまなざし」⁽⁴⁰⁾ だったという。桐原が

「素人義太夫」や「素人謡曲」や「俳優」を対象に行った懸賞付きの人気投票の意味は、こうした文脈から読みとることができよう。近代移行期の国家は、学校や軍隊という制度によって人々を「国民」化していった。そして、私は新聞という出版資本主義が、そこで果たした役割についてすでに多少の考察を試みた。⁽⁴¹⁾ そして、「国民」化の次の段階において、新聞は人々の日常的な娯楽の領域に深く入り込んできたのである。

たとえば、もっとも成功した「俳優」の人気投票について考えてみよう。それは、つまりは「どの役者がいい役者なのか」について、大衆自らが序列を作ることの意味していた。そこでは、演劇という娯楽の領域における「国民」が持つべき趣味や嗜好を含めた広い意味での感性にある種の秩序が与えられたのである。「想像の共同体」⁽⁴²⁾ の住人である「大衆」国民における「感性の均質化」と、それは言えるだろう。

桐原捨三が展開した「桐原式」の新聞販売戦略は、「大衆新聞」が生まれる前夜にこうした新しいかたちで「国民」形成に関わるものだった。

おわりに——「桐原式」以後

「大阪毎日」は一九〇〇（明治三三）年七月一日、創刊六千号の記念日を迎えた。この日、大阪ホテルで「俳優投票」の懸賞品授与式が行われた。第一位になった片岡我當ら三百人は揃いの浴衣姿で道頓堀から八隻の大型屋形船に乗りこみ、三味太鼓で囃し立てながら会場に入った。授与式が終わると、ふたたびその船で大川に出て祝賀納涼会に移った。伝馬船の上に作った土俵では大阪相撲協会の力士たちが船上大相撲を行い、打ち上げ花火、仕掛け花火が次々に夜空を飾った。⁽⁴³⁾

なかなか華やかな光景である。これらの趣向を演出したのは、やはり桐原だった。ここには、これまでふれてこなかった「桐原式」の持っていた重要な側面が明瞭に姿を見せている。政治や経済などのあり方を論評し、国内外のさまざまなニュースを報道する。新聞は桐原の時代も現代も基本的にはこうしたものだろう。だが、新聞は別のこともするのである。新聞は自らが「出来事」を作り出すメディア・イベントという言葉が使われる。その意味す

るところは重層的だが、⁽⁴⁴⁾ここではマス・メディアが行うイベントとしておこう。桐原が「大阪毎日」六千号記念の際に行ったのは、まさしくメディア・イベントだった。新聞は「出来事」を作りだし、それを報道する。人々はその「出来事」をさまざまに体験し、記憶する。

しかし、こうしたかたちで「出来事」を作り出すという意味では、桐原が行った懸賞人気投票それ自体も実のところ、メディア・イベントに他ならない。日々紙面化される得票経過はまさしく「ニュース」だったし、人々は「素人義太夫」なり「俳優」が目の前で序列化されていくという「出来事」に関わっていたのである。メディア・イベントとして「新聞」が行ったものが、前節で述べた「感性の均質化」をもたらすという関係に、私は「国民国家」の中における「新聞」のいる場所を読みとりたいと考える。「桐原式」は「大阪毎日」による「大阪朝日」の急迫の時期に出現し、さまざまな話題を呼んだことによって、固有名を得た。桐原その人の華々しい活躍の後、その言葉は使われなくなった。しかし、「桐原式」はまもなく誕生することになる「大衆新聞」の中に、いわばビルト・インされる

ことによって、その固有名を消したのである。「出来事」を作りだし、大衆の感覚や欲望を動員する「大衆新聞」のメディア・イベントは以後、日常化する。そして、メディア・イベントによって作り出される「出来事」も多様となっていく。⁽⁴⁵⁾ むろん、そこにおける大衆の「感性の均質化」も「素人義太夫」や「俳優」といった、ある意味で素朴な対象とは違ったレベルのものになっていくだろう。そこに総力戦体制化の新たな社会編制を⁽⁴⁶⁾予感しつつ、ひとまず小稿を閉じよう。

注

- (1) 同書は一九二四(大正一三)年に東京帝国大学明治新聞雑誌文庫の創設に関わり、一九二六(大正一五)年からは同文庫の主任を務めた宮武外骨の備忘録的原稿が基になっている。これを西田長寿が補綴して一九六七(昭和四二)年から『日本古書通信』に百三回にわたって連載し、一九八五(昭和六〇)年、みすず書房から刊行された。新聞・雑誌とのに関わりを中心に記述している。生涯に十六もの紙誌に関係した中江兆民の分量が多く、それに比べて福沢諭吉が相対的に少ないのは、そのゆえである。
- (2) 経歴その他の伝記的事項については、主として福良虎雄編『桐原捨三翁追懷録』(大阪毎日新聞社、一九三〇年)による。同書は関係者の回想を集めて編年的に編集したもので、巻末に「桐原捨三翁略年譜並に其時代」を収録している。ただし、この「略年譜」の明治一〇年代までの記述は疑問の部分が少なくない。
- (3) 岡田翠雨「神戸新報時代(其三)」福良虎雄編、前掲書、三八頁。
- (4) 小野秀雄『日本新聞発達史』(大阪毎日新聞社・東京日日新聞社、一九二二年)二五〇頁(引用に際しては現代仮名遣いにした。以下同様)。
- (5) とはいえ、従来とは違ったかたちで桐原捨三にふれた研究も出ている。津金澤聰廣編著『近代日本のメディア・イベント』(同文館、一九九六年)は「メディア・イベント」という視点から、新聞をはじめとしたマス・メディアと国民との関わりを追求している。同書所収の津金澤「大阪毎日新聞社の事業活動と地域生活・文化——本山彦一の時代を中心に」はその一部で桐原の行った事業を紹介している。
- (6) 拙著『スキャンダルの明治——国民を創るレッスン』(筑摩書房・ちくま新書、一九九七年)。
- (7) 慶応義塾研究教育情報センター所蔵の「慶応義塾入社帳」には出生日がこの年の「正月一二日」となっている。

- (8) 『鴻巣市史 資料編5 近・現代一』（鴻巣市、一九九二年）一七九頁。なお、河野恵助の名前は、「埼玉県改進黨名簿」（同書三七二頁）の二十六人の中に見える。
- (9) 福良虎雄編、前掲書、一八一二三頁。
- (10) 「慶応義塾入社帳」によれば、加藤は一八七五（明治八）年一月二二日、桐原はその七日前の一一月一五日に入学している。
- (11) 後述のように桐原は一八九〇（明治二三）年の第一回衆議院選挙に埼玉第二区から立候補して落選するが、この文書は、その際に作られたものらしい（前掲『鴻巣市史資料編5 近・現代一』三七二―三七四頁）。
- (12) 毛利敏彦「大阪商業講習所の誕生と福沢諭吉——大阪市立大学事始め」『近代日本研究』2（慶応義塾福沢研究センター、一九八五年）二二九頁。
- (13) 福良虎雄編、前掲書、二二頁。
- (14) 毛利敏彦、前掲論文、二二〇―二二五頁。毛利は加藤の社説の内容は福沢が森有礼らの要請で一八七四（明治七）年一月に書いた趣意書「商学校を建るの主意」酷似していることを指摘している。
- (15) この二つの文書は『大阪市立大学百年史 全学編』上巻（大阪市立大学、一九八七年）二六頁と四一頁に収録されている。
- (16) 福良虎雄編、前掲書、一四頁。
- (17) 吉田祥三郎「神戸新報時代（其一）」福良虎雄編、前掲書、三三頁。
- (18) 福良虎雄編、前掲書の「略年譜」に「総務理事」とあるのだが、岡田翠雨「神戸新報時代（其三）」は「会計主任として」と述べている（同書、四一頁）。
- (19) 福良虎雄編、前掲書、六二頁。
- (20) 前掲の岡田翠雨は桐原の落選後、「改進黨新聞」を退社するのだが、「その前に桐原さんに退社して貰いたいと私は若手記者を代表して運動しましたが、社長が桐原氏を信じることが深かったので、それは行われなかったのです」と回想している（福良虎雄編、前掲書、五一頁）。
- (21) 桐原の人となりについては、福良虎雄編、前掲書にいくつか「証言」があるが、洒落た粹者といった感じが強い。「政治家」に必要なある種のアクの強さが希薄である。
- (22) 『松陰本山彦一翁』（大阪毎日新聞社・東京日日新聞社、一九三七年）二二八頁。
- (23) 原敬文書研究会編『原敬関係文書 第三巻 書翰編三』（日本放送出版協会、一九八五年）三九三―四頁。
- (24) 『値段の明治大正昭和風俗史』上（朝日文庫、一九八七年）五八三頁。
- (25) 『毎日新聞百年史』（毎日新聞社、一九七二年）三五三

頁。

- (26) 原奎一郎編『原敬日記』第二卷(乾元社、一九五〇年)二七四頁。
- (27) 前掲『原敬関係文書 第一巻 書翰編一』五〇九頁。
- (28) 以下、「大阪毎日新聞」の歴史については前掲『毎日新聞百年史』を参照。
- (29) 「大阪朝日新聞」の発行部数については、山本武利『近代日本の新聞読者層』(法政大学出版局、一九八一年)の「別表・新聞発行部数一覧」による。
- (30) 福良虎雄編、前掲書、七〇頁。
- (31) 「桐原式」という言葉がいつ、どのようにして生まれたかは不明である。だが、盛んに使われたことはまちがいない。たとえば、本山彦一は桐原の葬儀の際の弔辞で「君が本社に入社せられたる時は、本社の事業未だ旺盛ならず、新規拡張の事業一に君の手腕に期するもの多かりしが、君が老練なる経営と卓越せる手腕に依り、新案妙趣、諸人の意表に出て、着々奇功を奏し、我新聞界に「桐原式」なる新語を生ぜしむるに至りしは、遍く人の知る所なり」と述べている(福良虎雄編、前掲書、二―三頁)。
- (32) 一八九七(明治三〇)年の「大阪毎日」の年間発行部数は二千百四十二万八千四百七部で年間三百日発行として一日の発行部数は七万四千四百二十八部である(山本武利、前掲書の「別表・新聞発行部数一覧」。一九〇三(明治三六)年の元日部数は、前掲『毎日新聞百年史』三五五頁。
- (33) 「家庭小説」の流行を生む菊池幽芳の連載小説「己が罪」(前編一八九九・明治三二年八月一七日―一〇月二二日、後編一九〇〇・明治三三年一月一日―五月二〇日)の人氣も大きな要因だった。
- (34) 土方正巳『都新聞史』(日本図書センター、一九九一年)二〇頁。
- (35) 「桐原式」の「懸賞人氣投票」に対しては、一九〇〇(明治三三)年六月一日に「大阪朝日」が「懸賞投票の流行」と題した社説で批判し、これに対して「大阪毎日」も翌日、社説「朝日新聞の謬論」で反論したため、同月半ばまで連日のように論戦が続いた。このときは、大阪府知事と大阪市長の仲裁で事が収まったが、その後も「大阪毎日」と「大阪朝日」は、「大阪毎日」の行った「代議士予選投票」や「大阪瓦斯報償問題」での対立などで激しい紙上論戦を繰り広げていた(『朝日新聞社史 明治編』朝日新聞社、一九九〇年、三九八―四〇六頁)。
- (36) 市村芳香『新聞販売史 明治篇』(新聞情報社、一九五〇年)一七七頁。
- (37) 前掲、『毎日新聞百年史』四三三頁。
- (38) 就学率は明治一〇年代後半に松方デフレの影響でむしろ

後退するが、二〇年代に入ってから順調に伸び、一八九一（明治二四）年に五〇％を超えると、後は毎年かなりの上昇を続け、一九〇〇（明治三三）年には八一・四八％になっている（文部省『日本の教育統計 明治～昭和』一九七二年）。

(39) 吉見俊哉『博覧会の政治学——まなざしの近代』（中公新書、一九九二年）二五頁。

(40) 吉見俊哉、前掲書、二六四頁。

(41) 前掲拙著『スキャンダルの明治——国民を創るレッスン』。

(42) ベネディクト・アンダーソン『増補 想像の共同体——ナショナルリズムの起源と流行』（白石さや・白石隆訳、NTT出版、一九九七年）参照。

(43) 前掲『松陰本山彦一翁』七三―四頁。

(44) 吉見俊哉「メディア・イベント概念の諸相」前掲、津金沢聰廣編著『近代日本のメディア・イベント』参照。

(45) 桐原捨三の死後、「大阪毎日」が行ったメディア・イベントの中で「感性の均質化」の観点からとりわけ興味深いのは、一九二七（昭和二）年の「新・日本八景」の募集である。投票総数九千三百四十八万に及んだ（前掲『毎日新聞百年史』五四八頁）。これは人々の「風景」を見る感性を均質化する試みに他ならなかった。

(46) 「総力戦体制」の概念については、山之内靖「方法的序論 総力戦とシステム統合」山之内靖ほか編『総力戦と現代化』（柏書房、一九九五年）参照。